

(有) 静岡健康企画 ことぶき薬局 TEL055(977)6024 たまち薬局 TEL054(251)1678
 ひまわり薬局 TEL053(463)4312 みかん薬局 TEL053(584)2230 いちご薬局 TEL055(946)6430

鎮痛剤 (パート2)

前回のパート1では、いわゆる解熱鎮痛剤について特集しました。

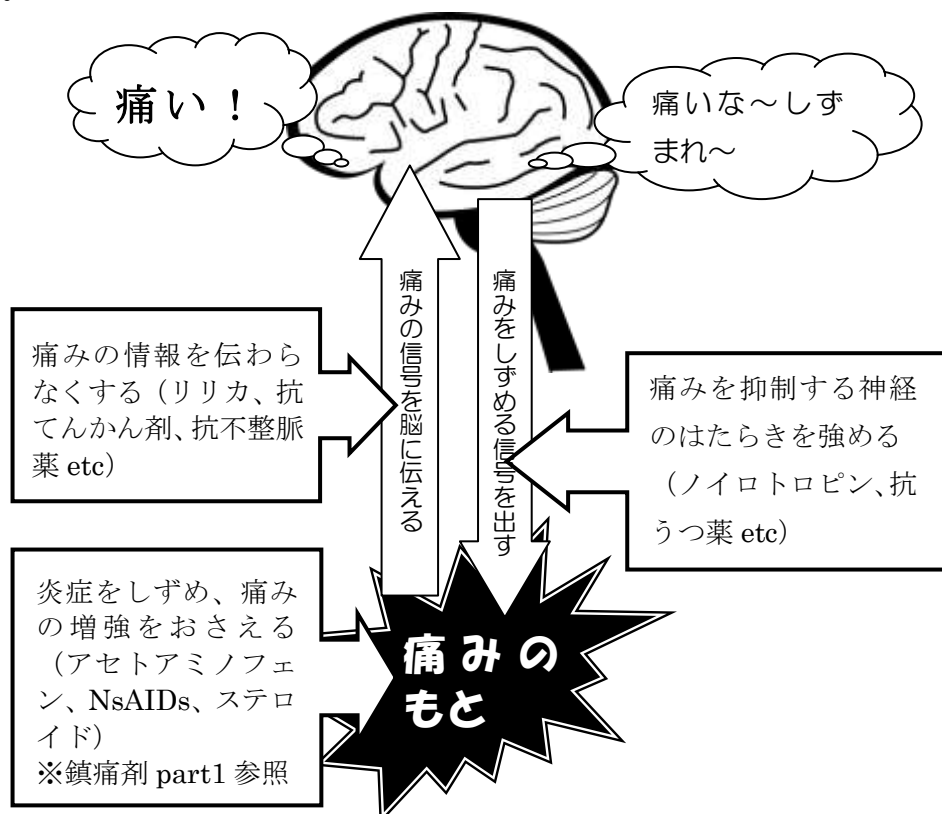
しかし、これらの薬だけでは十分対応できない痛みもたくさんあります。いわゆる「神経痛」あるいは「慢性痛」がその代表的なものです。今回はそんなときに使われるお薬や、その他の痛み止めについて特集します。

そもそも慢性痛とは？

下図のように、ケガや炎症といったものがおきると、まずは神経がそこからの痛みを脳に伝えます。からだのどこかがケガをした、という「危険信号」を痛みとして脳に伝えるようになります。痛みの刺激が脳に到達すると、脳は痛みの程度がどのくらいか認知します。そして、今度は「痛みをしずめる信号」を出し、痛みをしずめる神経がはたらきます。

通常は、ケガや炎症などがおさまればこの痛みをしずめる信号によって痛みもおさまられていくのですが、炎症はもうおさまっているのに、神経が暴走して、痛み信号だけが伝わりつづけている場合もあります。また、痛みの部位の感覚が異常に過敏になり、場合によっては衣服がこすられただけでも強い痛みを感じることもあります。こうなると、通常の解熱鎮痛剤などでは対処がしにくくなってきます。

また、「痛いから」と動かなくなることで筋肉の量が低下し、歩行や起立などが困難になる場合もあります。



治療法について

薬物療法では、鎮痛剤にあわせて、それらを補助する、いわゆる「鎮痛補助薬」を使用します。ほかにも心理療法、運動療法、神経ブロック療法、手術療法などもあります。これらの治療法を組み合わせ、患者さんひとりひとりに最も適している治療方法を見つけていきます。

代表的な鎮痛補助剤（作用の仕方については、表面の図を見てください）

■痛みを抑制する神経を活性化し、働きを強くするくすり

★ノイロトロピン

急性の痛みには効果はありませんが、慢性の神経痛や、原因のはっきりしない痛み、中々治らない痛みなどをやわらげる作用があります。また、胃腸障害などの副作用を起こしにくいので、長期に使う事ができます。

★抗うつ剤（エチカーム、デプロメール etc）

眠気やふらつき、吐き気などがでることがあります。

■痛みの情報を伝わらなくするくすり

★リリカ

様々な神経性の痛みには効果があるといわれ、最近幅広く使われるようになってきました。しかし、眠気やふらつき、意識消失などの副作用が出やすいため、自動車の運転などには十分注意しましょう。とくに高齢者に関しては転倒し骨折などの原因にならないよう、日々の注意が必要になります。また、自分の判断で突然中断すると思わぬ副作用がでることがありますので、中止・減量については医師の指示をよく聞いて行いましょう。

★抗てんかん剤（デパケン etc）

三叉神経痛など、知覚神経に異常があるような症状に対して効果があるといわれています。眠気やふらつきが出ることもあります。また、一部の薬剤では血液障害がでないよう、薬の血中濃度の定期的な測定が必要な場合もあります。

★抗不整脈薬（メキシチール etc）

糖尿病の合併症として起こる神経痛に効果があるといわれています。

痛みと「お付き合い」していきましょう

慢性痛の治療のゴールは、完全に痛みをゼロにすることではなく、「痛みを緩和して、共存すること」「痛みを勝つことではなく、負けないこと」です。

痛みの程度はひとりひとり異なり、全く同じ状況ということはありません。天候の変化、まわりの環境などによっても痛みが増えたり減ったりすることもあります。

また、社会復帰を目指して、「いますぐ直さなければならない」と焦ることで、心理的な混乱が生じてうまく痛みが改善しないこともあります。

今すぐに痛みがゼロになることがなくとも、医師の先生とよく相談し、よりよい生活ができる、より満足できる治療法をみつけていくことが大事なことです。

参考資料：日本ペインクリニック学会、日経DI、クレデンシャル

文責：間間

